読む医療 専門医が語る現代病気事情

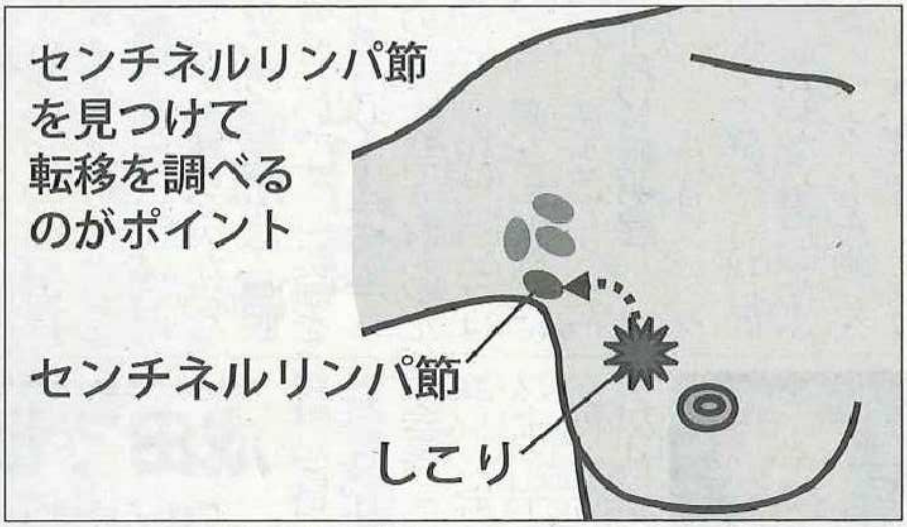
乳がん治療の主流は「温存手術」

乳がんは女性に最も多いがんで、約15人に1人が一生のうちにかかるといわれています。30歳代から60歳代までの女性に多く、妊娠出産歴がない女性、あるいは妊娠回数の少ない女性に多い傾向があります。また、遺伝的にリスクの高い家系が存在し、米国の有名女優ががんの発生前に乳腺の摘出手術を受けたニュースは記憶に新しいところでしょう。

乳がんの自覚症状の一番は乳房のしこりです。がんが皮膚に浸潤してくると乳房の一部がえくぼのように陥凹します。乳がんがもっとも多くみられる部位は乳首より上の外側で全体の約半数を占めています。次いで、乳首より上の内側に多くみられます。一方、乳首より下にはあまり多くみられません。乳がんで痛みを感じることはほとんどありません。したがって、痛くないから安心と思わないように注意してください。また、検診で無症状の小さな乳がんが発見されることが稀ではないことも強調したいところです。

◇執筆者紹介＝宮下正夫／日本医科大学消化器外科教授／日本医科大学千葉北総病院外科部長　医学博士／日本消化器外科学会指導医／日本消化器病学会指導医／日本がん治療認定医機構認定医／日本消化管学会胃腸科指導医／消化器がんの手術が専門。

転移なければリンパ節の温存も



最近の乳がん手術では、できるだけ乳房を残す手術、言い換えればできるだけ小さく切り取る『温存手術』が主流です。転移しやすい脇の下のリンパ節も可能な限り摘出しないようになりました。このため、最初に転移するはずのリンパ節（センチネルリンパ節と呼びます）を手術中に見つけ出して摘出し、顕微鏡で迅速組織検査します。ここに転移がなければリンパ節の摘出は行いません。この方法は急速に普及しましたが、手術に合わせて顕微鏡診断を行う病理医の存在が必須条件となりました。

10年経過後の再発ケースあり長期フォローが重要

最近のがん治療では手術、薬物療法、放射線療法などそれぞれの特徴を活かし、組み合わせて行うのが一般的です。その考え方の先陣を切ったのが乳がん治療といえるでしょう。ホルモン治療が効果的な点も乳がんの特徴です。通常、がんの再発は術後数年以内に見られますが、乳がんの場合はまれに10年以上経過してからも再発することがあるのでフォローアップは長期計画で行うことが重要です。

【訂正】前号11月28日付の肝臓がんの記事の見出しが間違っておりました。正しくは「肝臓がん治療は様々な方法で」です。訂正しお詫び致します。